

愛知大教授 (図書館情報学)

ときざね  
時実  
そういち  
象一

## 私の視点

siten@asahi.com

## ◆ウィキペディア

## 安易な引用はやめよう



7月5日付の各紙は、静岡新聞がコラム記事「大自在」において、インターネッ

ットの無料百科事典「ウィキペディア」の記述を出典を明示しないまま引用していたと報じた。亡くなった宮沢喜一元首相についてのエピソードを紹介する際、ウィキペディアに記載されていた内容をそのまま用いたという。

ウィキペディアは、米国のジミー・ウェールズ氏が01年に創設した。「誰でも

執筆でき、誰でも編集や修正・加筆ができる」という点特徴だ。執筆や編集するために何の資格も登録も必要ないし、ほとんどの執筆者が匿名またはペンネームである。

書きたい人が自由に執筆するので記事の数は急激に増加し、英語版は約190万件、日本語版でも市販の百科事典の数倍にあたる39万件余に達している。執筆された記事に誤りや虚偽があれば、見つけた人が修正するので、次第に内容の正確性が高まっていくという好循環が実現している。

しかしウィキペディアの使い方には議論がある。多くの人の目に触れる項目で

は、誤りがあれば直ちに修正されるが、それほど関心をもちたれない記事では、誤りや虚偽があっても長期間にわたって放置されることは十分ありうるからだ。

昨年12月、米国パーモント州ミドルベリー大学の日本史教授ニール・ウォータース氏は、学生の試験解答を見て、まったく同一の誤った記述が数多くあることに気づいて驚いた。それはウィキペディアの誤った記述の引き写しだったのである。事件に怒ったウォータース教授は以後、学生がウィキペディアから引用することを禁じたという。

このような考え方については、ウィキペディア自身

が賛成している。米サンタクルス・センチネル紙(電子版)において、ウィキペディアの広報担当であるサンドラ・オールドネス氏は「学生はウィキペディアで見つけた情報については出典に当たって調査すべきである。ウィキペディアを引用することは好ましくない」と述べている。

ウィキペディアに限らず、インターネットからの引き写し(学生はこれをコピー、つまりコピー・アンド・ペーストと呼んでいる)は教育現場に蔓延している。図書館で参考図書を広げ時間をかけて調べるかわりに、ウィキペディアからちょっとコピーすれば、

あっという間にレポートができあがる。

だが、学校で書くレポートや職場で提出する報告書に記載する情報は信頼性が第一だ。信頼性とは、追跡可能性であり検証可能性である。すなわちその情報やデータの出所が示されることだ。それにより、必要な場合に生のデータや執筆者・発言者に当たることが可能となってくる。

教師は学生・生徒のインターネット乱用の現状を認識し、ウィキペディアを含むインターネットの情報については、「利用はするが引用はしない」ことを徹底していただきたい。誰かがおせん立てした情報に頼るのではなく、自分の目と頭で調べて考えることが、創造性や自立した判断力を育てるはずである。

あっという間にレポートができあがる。